

カツオ漁業の現状と問題点 Skipjack Fishery : Status and Problems

肥後道隆 (鹿児島県水産試験場)
Michitaka Higo

全国のカツオ漁獲量は昭和48年30万トンに急増し、その後も現在までほぼその量を、維持している。

この間、漁場は日本近海から太平洋全域に拡大し、漁法も従来の竿釣と、PNG (パプアニューギニア) 海域を主漁場に南方まき網漁業が急速に発展してきた。

竿釣漁業は昭和40年頃から南方漁場の開拓で着業隻数の増加、漁船の大型化で急速に漁獲量は増加したが、昭和50年に入り南方大型船は、魚価の低落、燃料の高騰、200海里設定に伴う漁場規制などの悪条件で経営不振の経営体が多く減船が目立ち、昭和56年270隻が、59年には80隻に激減した。従って漁獲量も49年の約21万トンをピークに減少し、58年には約13万トンとなった。

一方、南方まき網は昭和56～57年に竿釣などからの転換船によって行なわれ、58年には32統まで増加し、漁獲量も57年—7万トン、58年—10万トン前後と増加している。

現在のカツオ総漁獲量の30万トンを漁業種類別、海域別にみると、南方竿釣、南方まき網、および日本近海沿岸竿釣が、それぞれ10万トン程度づつ漁獲しているのが現況である。

南方カツオ漁業が開拓され始めた昭和40年代後半の漁業的背景をみると、当時のマグロ漁業は資源の減少で、停滞又は行き詰まりの状態であえぎ、これに代る大きな潜在的資源と考えられるカツオが開発可能な魚種として注目された。

このように注目された原因を資源的な見解として次のように述べられている。稚魚網で採集されるカツオの仔稚魚は他の大型魚に比べ、いちじるしく多い。マグロ・カジキ類の胃内容物から出現するカツオの稚魚もマグロ類に比べはるかに多い。また、漁業の行われている海域は、日本近海とか、西部太平洋の一部でカツオ分布域の全部ではない(分布域の縁辺水域である)。

漁獲対象となる年令もⅠ～Ⅱ才魚であり、漁法も魚の生理条件に依存する竿釣が主である等がカツオ漁業の推進を期待する根拠であった。

◎南方竿釣の現況

現在漁場は西経150°以西のほぼ全域を覆い、6～8月は亜熱帯反流域、6～12月は北赤道反流域、1～4月は北赤道海流域と南赤道海流域に形成されている。魚体はⅢ才魚主体にⅣ才魚以上の高年魚で構成される。体長体重及び年令査定結果などからみれば、卓越年令群は認められず、年による組成の変化も少ない。年令別漁獲尾数をもとに Cohort 解析法で最近の資源重量は、安定した状態が続いている。

◎南方まき網の状況

漁場は南緯2°～北緯7°、東経138°～東経155°のPNG・ミクロネシア海域である。木付群で70～

80%、浮上群では35%位の成功率で単位努力当り漁獲量は20トン前後である。

魚体は開発初期には小型魚に偏重したが、近年は中・大型魚（Ⅲ、Ⅳ才魚）が漁獲の中心となっている。資源への影響については全く不明である。下記に両漁法の比較と今後の問題点を列挙する。

表1. 竿釣・まき網の利点及び弱点

	竿 釣	ま き 網
利 点	①漁具費が安価 ②漁獲魚の鮮度が良い ③漁船の機装がまき網より簡略	①漁獲効率が大きい ②カツオの摂餌等の行動に関係なく漁獲の対象
弱 点	①活餌が必要 ②魚群によって摂餌しないものがある ③釣手として多くの乗組員が必要である	①漁具費が大きい ②一操業の時間が長く労働量が比較的多い ③網中で魚を死亡させる場合があり鮮度の低下につながる ④機装が一本釣より複雑高価 ⑤漁法技術が比較的高度なものを要する

◎問題点

①南方カツオの資源状態について

まき網の漁獲拡大に伴って変化する資源と漁獲努力量の関係

②需給のバランス及び国内需要対策

魚価の低落防止。B₁（ブライン1級）の取り扱いと漁獲物の付加価値の向上

③外国船との競合

④漁法等の開発

⑤経営安定の方策